

患者の苦しみ胸に研究



がん光免疫療法を開発
小林久隆さん

がんの克服は人類の長年の夢だ。外科手術、放射線治療、化学療法に加え、近年は免疫チエックポイント阻害剤などの免疫療法も登場した。さらに第5の治療法と呼ばれるのが「光免疫療法」。がん細胞だけを殺しながら、残ったがんと闘う免疫も増強させる。開発したのは米国立衛生研究所(NIH)の日本人研究者、小林久隆主任研究員(62)だった。

小林さんは京都大医学部を卒業後、放射線科医

がんの新治療法を解説する小林久隆さん。大阪府枚方市



として歩み出した。放射線を患部に照射すると、

正常な組織や免疫細胞も含めて周辺一帯が「焼け野原」のようになった。治っても副作用や後遺症がひどく、多くの患者が苦しむ姿を見てきた。

がんだけを殺す方法はないか。当時、甲状腺に蓄積しやすいヨードの放射性同位元素を甲状腺がんに取り込ませ、がんを殺す治療法があった。しかし、がん細胞に取り込まれる前に、骨髄など

の放射線に弱い細胞がダメージを受けた。

「投与する時には毒ではないが、がんのところまで毒になればよい」。考え抜いた末の論理的な帰結だった。問題は、毒に変えるスイッチの役割を果たす化学反応だ。

国内では医局の関連病院でアルバイトをしながら論文を書く日々。日本においては思うように研究ができないと、渡米を決意した。大学での昇進の道は閉ざされた。

こばやし・ひさたか 1961年兵庫県西宮市出身。京都大大学院医学研究科を経て2015年から米NIH主任研究員。22年から関西医大光免疫医学研究所長を兼務。